

夜間に発生した熊本地震では、多くの人は家族が家にいる状況だったと思います。災害はいつ起こるか分かりません。日中家族が離れた状況で災害が起こったら、どのように連絡するのか、どこに集合するのか。大切な人と生き延びるために、経験を生かして想像することで、今できることが見えてくるはず。町では、全世帯にハザードマップを配布しています。このマップは危険箇所や避難場所、非常用持出品のリストなども掲載しています。これを使い、災害から身を守る方法を家族で確認しましょう。難しいことはありません。家族でマップを広げるだけで対話の時間ができます。



避難所では情報を見えるように書いて設置 避難者が安心できるよう工夫していました

### 家族で話そう、防災のこと

### 一人一人が「防災の担い手」

「防災」と聞くと、力仕事などをイメージする人が多いかもしれませんが。災害の時、力仕事などは自衛隊や消防署が行い、私たちの拠点は多くの場合避難所になります。生活の場である避難所では、男性女性子ども、それぞれの視点で知恵を出し合うことが大切です。また、もし日中に災害が起きたら、対処できるのは家にいることが多い女性や子どもたちです。震災を経験した私たちだからこそ、一人一人が助け合い、助けられる防災の担い手になるという意識を忘れないことが大切です。

### 地域のつながりが大きな力に

災害発生直後、自衛隊、消防署、消防団、役場などの公的機関は、全力で災害対応にあたります。しかし、災害が大規模であれば、全てに対応することは困難です。自分でできることを自分で行うことで、もっと支援を必要とする人に支援が行き届きます。自分ではどうすることもできず、「公助」が間に合わない場合、「共助」が必要不可欠です。共助で大切になるのは、情報を交換すること。隣に「誰が」「何人」住んでいるのか分からなければ、助けようがありません。自分たちの地域を自分たちで守るための任意の防災組織「自主防災組織」。町では現在62団体組織されています。こういった場で顔の見える関係を作ることでも、いざというときに助け合うためのつながりができます。日々、道ですれ違う時にあいさつを交わすことだけでも、地域の防災力向上につながります。



1床一面に本が散乱したおおづ図書館 2落石により地割れした切畑線道路 3よう壁が崩れ土砂が堆積した上井手 4人権啓発福祉センターでは焚き火を囲んで避難者が身を寄せました 5蛇口だけが残る倒壊した家屋 6落石により社殿が倒壊した瀬田神宮 7配給に並ぶ長蛇の列

あの日から3年

# 震災を忘れない

甚大な被害をもたらした平成28年熊本地震から今年で3年。時間が経つにつれ、その記憶やその時の思いは風化していくかもしれません。しかし、震災から得た教訓は風化させてはいけません。あれから3年が経過する今、私たちには何ができるのか。東日本大震災と熊本地震を経験した防災士の山本明香さんに話を聴きました。

### 地震から得た教訓を生かす

地震直後は、日々を乗り切るために必死で、この状況で何が最良か知恵を出し合い、もっとこうしておけば良かったと考えたり、「普通の毎日」のありがたみを感じたりしました。全国からの物資提供やボランティア、声を掛け助け合う地域住民同士のつながりなど、たくさん大切なものにも気付かされたと思います。生活が元に戻ってくると、どうしても震災について考える時間が少なくなり、「防災」と聞くと構えてしまう人も多いと思います。でも、地震を経験している私たちだからこそ、マニュアル通りではない、一人一人に合った「日常の備え」ができると思います。例えば、避難所では高齢の人がトイレに連れて行ってもらうのが悪いからと、トイレに行かないよう水も飲まず、脱水症状になることがあります。状況によっては避難所に行かないのも一つの選択肢。そのためには何を準備すれば良いか考える。震災で感じた思いを忘れず、想像して、日々の生活の中で備えることが大切です。



防災士 山本明香さん(引水) Profile やまもと・あすか 熊本地震でいち早く避難所に駆けつけ運営に尽力。仕事と育児をしながら防災士としても活躍。

## 高尾野自主防災組織

平成25年に自主防災組織を結成し、当初は災害に備える活動ができていたか不安に思うこともありました。熊本地震で停電の中20人程公民館に集まり、防災倉庫の準備や訓練の成果もあってすぐに発電機を稼働し明かりがついた時、誰かの言った「自主防災会を作っていて良かったね」という声に救われました。いざという時に助け合える基盤づくりは、継続していかなければなりません。また、住民の皆さんと協力し助け合うためには、まず「自分のことは自分で守る」ことを



高尾野区長兼防災士 府内清喜さん(高尾野)

徹底していないと、人を助けることはできないと強く感じました。これからも、普段から住民同士が支え合える地域にしていきたいです。



毎年恒例のそば打ちなど災害時でも顔の見える関係づくりを続けている

### いつでもできることを

災害はいつ、どのように発生するか分かりません。それぞれの立場や状況によって、その時の一番望ましい行動も変わります。私たちの強みは、震災を経験していること。こんな時はどうするか、想像して今から備えることができます。地震で感じた思いを忘れず、普段の生活の中でできることから防災対策を見直す。熊本地震ではできなかったことが、何か一つでもできるように。もしもの時、大切な人と生き延びるために、震災を忘れず、経験を生かしてできることから始めませんか。

## 熊本地震大津町復興シンポジウム

- 日時 4月14日(日) 午後1時～3時
- 場所 町生涯学習センター 文化ホール
- 内容 DVDによる地震の追体験 記念公演 災害時の避難所運営と各地区での備えなど
- その他 託児も行います(要予約)
- 問い合わせ 総務課 地域安全係 ☎096(293)3111



記念講演 熊本大学准教授 竹内裕希子さん